

宮操子の動きの理論『動の美』の「基本Ⅱ」 及び動き・[出す]についての考察

堀切紋子

〔序〕 宮 操子（みや・みさこ）は、氏の著『動の美』（どうのび・1997）の中で、人間は、『偉大なる自然の前にすべて無力』であるとの考えに立ち、「光と闇」、「天と地」、「雄と雌」、「静と動」、「生と死」などのように二つの相反するものの調和によって成り立っている自然から、[正]（せい）・[反]（はん）という動きを導き出し、素足で踊る舞踊のための身体運動の理論を述べている。その動きの理論『動の美』の基幹を成すものは「三つの基本」である。

その「基本Ⅰ」・「基本Ⅱ」・「基本Ⅲ」は、『立っている自然な状態から動きを研究』したもので、『無限に発展してゆく動きの展開への入口であり、あらゆるすべての動きはここに還ってくる』と述べている。そして、これらは『動きの「ふるさと」すなわち、河の源流であり、帰るべき「ふるさと」があるのは大切なこと』とも表現している。

本報告では、「基本Ⅰ」（98舞踊学会秋季大会発表）に次いで、「基本Ⅱ」とそれに関連する動き・[出す]について考察する。

〔本論〕 「基本Ⅱ」は、「基本Ⅰ」と同様に、

[歩く]という動きから創造され、両腕を前後に振りながら歩いたらどうなるか、ということから発見されたものであり、[2本の腕を同時に同方向に出す]という両腕と片脚との関係から成り立ち、足の運びの連続が「基本Ⅰ」の足型と同じ16歩に収められている。そして、同様に、16歩の中に、[前]と[後ろ]（1～4歩）、[右]と[左]（5～8歩）、[左斜め前]と[右斜め前]（9～12歩）、[左斜め後ろ]と[右斜め後ろ]（13～16歩）の8方向が組み合わせられ（右足から前へ[歩く]という原形の場合）、特に[斜め]4方向の配置が16歩の流れに動きの妙味を作っている。

そして、この原形①の他に、左足から前へ[歩く]—②、右足から後ろへ[歩く]—③、左足から後ろへ[歩く]—④という3種があり、4種総てを動くこと、さらに後半（9～16歩）の[斜め]方向への足（脚）の交差しない出し方を動くことで、からだの均等な方向感覚を的確に知らせる構造をもっている。

「基本Ⅱ」での、両腕と片脚の[正]の関係とは、動いた片脚と反対方向に両腕が同時に同方向

に動くことを言い、[反]の関係とは、動いた片脚と同方向に両腕が同時に同方向に動く関係を言う。そして、[正]・[反]の動き双方を等価値において動くことが、からだの動きに自由闊達さを増すために重要であると考えられている。

そして、著者は、『すべて動きを会得するには段階を意識して大事にすることが大切』であると考え、小さい動きから大きい動きへ、または、緩やかな動きから徐々に速い動きへなどと移行し、最終的には各自のからだの動きの極限までを動いてみることを提案している。

従って、「基本Ⅱ」の動きも、1段階「小さい動き」、2段階「中くらいの動き」、3段階「大きい動き」と段階を経て記述図示され、動きの量が増えることで、同じ動きがこのように変わるのかという発見と感動をもたらすものである。

『動の美』の中で著者は、[歩く]、[跳ぶ]、[回る]、[出す]、[曲げる]、[捻る]、[置く]という7つの動きを厳選している。その中で、特に胴体の部分を[出す]動きが、両腕を同時に同方向に動かすことを生み出し、「基本Ⅱ」の原形を修飾または強調する動きとして注目される。胴体の部分を[出す]とは、胸、中心、腰を起立位・水平面で8方向に[突き出す]ことであり、これは「動きの妙味」という章に述べられている「主と従の関係」を理解するに相応しい動きの源泉である。「主」たる部分をしっかりと意識して動くことの重要性、それによって影響される「従」の部分への意識が、動きをより鮮明にも微妙にもするからだを知り、動きの誕生を呼び起こすひとつと考えられる。

さらに、体重をかけずに脚を水平面・8方向に[出す]ことで、両腕と片脚の[正]の関係、[反]の関係共に「基本Ⅱ」を動いてみると、なお一層原形からの変化発展を体験し、自身の動きをゆたかにすることができるのである。

〔結〕 『正しい理論に基づいた肉体訓練なく

しては、たとえ良い主題であっても、良い表現、良い作品とはなり得』ず、『間違った肉体訓練を何十年とやることは無駄であり、それはからだどころに障害を引き起こし、そのうえ創造力さえも失う』と、著者は述べている。からだの自然を知り、自身の動きを創造し、その人自身が現在を生きているそのことが舞踊の土台であることを、この「三つの基本」の動きは知らせており、全章を通して舞踊への愛を伝えているのである。